

生命の起源に関する一哲学者の見解

——統一思想を援用して——

渡辺 久義

教科書記述の馬鹿ばかしさ

わが国の高校用生物教科書の一つに、生命の起源について次のような短い説明がある：

生命の起源——地球上での無生物からの生物の発生をいう。現在では科学がめざましい進歩をとげているので、ある程度は生命の起源について推論できるようになってきた。(1)

こういった文章——そしてこれはこの本全体の調子を表わすものだが——から、この著者あるいは著者が生きている文化について、いくつかのことを推測することができる。第一にこの人は、生命の神秘といったものに驚くことも畏怖を感じることもしない、あるいはそれを恥じるような人物である。第二にこの人は、生命は物質から生ずるものであって、他の何ものからでもない、当然のように考えている。この考え方以外にはありえず、この前提によって研究を進めていけば、いつか必ず問題は解決すると彼は考えている。第三に彼は、故意か否かは分からないが、現在の科学の情勢についてウソをついている。科学、少なくとも唯物論的科学は、生命の起源という謎について、これまでより以上に分かっているわけではない。

要するにこれは、典型的に唯物論的な時代と文化から生まれる言説である。またこうした精神構造の特徴は、他のいかなる世界観をも考えてみることも、あるいは許容することもできないことである。実際は、人間の長い歴史を通してみれば、唯物論的な世界観というものはほんの例外であつたにすぎない。しかし我々の現在の文化はこれを疑問ともせず、問うてみることを許そうともしないのである。

ところがこういった考え方は、しばしば馬鹿ばかしく、嘲笑を招くような事態となる。それは例えばNHKの生物に関する教育番組が、生命の起源の問題に踏み込んだときに起こった。その講師はいみじくも、生命の始まりを純粋な偶然によって説明しようとし、生命に必要な化学物質を、分解した時計の部品にたとえた。そして、もしそれらを箱に入れて何億年という長い間、振り続けていけば、ひょっとしたら時計がうまく組み合わさって動き出すかもしれない、と説明した。これは半ば冗談のようでもあつたが、しかし半ば以上真剣で挑戦するような口調であつた——この確率の低い出来事をそれ以外にどう説明できるか言ってみよ、というように。

こんな例は、生命の始まりについての特別に馬鹿ばかしい例と思われるかもしれないが、これに似たカクテル・シェーカーの比喻が、オックスフォードのダーウィニスト生物学者

リチャード・ドーキンズによって用いられている——ただ彼の場合、ダーウィンが救援にやってきて奇跡を起こしてくれるのだが。

一人の人間を作ろうとするなら、生化学的カクテル・シェーカーを、途方もなく長い間、この宇宙の年齢が一瞬に思えるほど長い間、振り続けなければならないだろう。だが、それでもあなたは成功しないだろう。ここでダーウィン理論がその最も一般的な形で、救援にやってくる。ダーウィン理論は、まさに分子のゆっくりした積み上げの物語が終わる時点で、あとを引き受ける。…ある時点で、一つの特別に注目すべき分子が偶然に形成された。これを「複製するもの」と呼ぶことにしよう。(2)

ドーキンズをかなり風変わりな学者と考える人もあるかもしれないが、彼の本がほとんど日本では翻訳されているところをみると、彼は現代の代表的生物学者として受け入れられているようである。生物学者のジョナサン・ウエルズによれば、「最初の細胞がどのようにして始まったかは誰にも分からないが、ほとんどの生物学者はこの出来事があまりにもありそうもない（確率の低い）ことだから、それは一回だけか、あるいはせいぜい数回しか起こらなかったと考えている。」(3)

したがって上にあげた教科書記述や、吹き出したくなるNHKの講義や、ドーキンズの唯物論的ドグマなどは、例外的でないばかりでなく、通常あるいは標準的なものとして広く受け入れられていると考えていいようである。

我々の生物教科書はかなりのページ数を生命進化の章に割いているが、そのすべてがこういった思考法、すなわち生命を扱うには、このような唯物論的＝自然主義的＝還元主義的な方法しかありえないという想定で書かれている。

それは確率の問題か？

最初の細胞であれ、その後の生物種であれ、生物の起源を自然主義的な言葉で説明するのはきわめて難しい。そういったものが自然に現れる確率は、たとえ我々が唯物論者のように、その外面的な形の完成（時計の完全な組み立て）だけで生命には十分だと考えたとしても、事実上ゼロである。

唯物論的学者も、ドーキンズがそうであるように、このことの難しさは認めるだろう。しかし不思議なのは、そのようなありえない、かつ考えられない出来事が、その圧倒的に不可能な確率にもかかわらず、ともかくも起こったのだと彼らが主張することである。生命の自然的発生は現実の事実であると主張される——そうでなくてどうして世界が存在できるか？

この挑戦的なダーウィンの主張は、哲学的観点からすれば二重の誤りである。

両側の人々とも、すなわち生命の自然主義的説明を批判する側も主張する側も、自然主義的説明が正しいか間違いであるかを決める決定的なものは、ただ一つ数学的な確率であ

るかのように言う。明らかに我々の教科書もその立場であり、いわゆる「化学進化」がすべてを決定するものであるかのように言う事実にはそれは現れている。そのような論争をすれば、ダーウィン側が決定的に不利なのは当然である。しかしそのような確率論争はそもそも正しい基盤の上に乗ったものであろうか？ 私の意味するのはこういうことである——たとえ数限りなく化学物質の組み立てを試みているうちに、万一、運良く思い通りの完全な形態が出来たとしても、その幸運な出来事はこの地上で生命を出発させるのに十分だろうか？ そもそもそれは生命として生きられるのだろうか？ これはより深いレベル、そもそも生命とは何か、というレベルからの問いである。

サルがタイプライターの前に坐って果てしなくキーボードを叩き続けても、シェークスピアの劇は生まれえない、とはしばしば繰り返される議論である。シェークスピアは論外である。しかし俳句ならどうか？ 俳句とは 17 の日本語の音節（音の単位）からなる詩形であるから、サルが偶然によってこれを叩き出す確率は、シェークスピアと比べれば格段に高いことになる。そこで今、一つの俳句として通用するものがそのようにして出来たとしよう。おそらく多くの方は、俳句が偶然によって作り出されたと宣言するであろう。しかし私は「それは本当に俳句か？」と問いたい。すなわち、芸術作品が生きているように生きているか、ということである。どんな芸術作品でも、それをデザインした人の人柄がそこに反映されている、すなわちその作品が作り手の一部であるという意味で、デザインされたものである。それがうまく出来ているかどうかは、ここでは問題ではない。サルはかなり出来のよい俳句を作り出したかもしれない。しかしそれは今まで人々が作ってきた俳句の集合体の中に加えることはできない——たとえその中に、サルの作品より下手な作品が含まれていたとしても。

偶然によって作られた俳句が、ニセモノであって生きてはいないことを証明する一番よい方法は、サルに一つ以上の、できれば数句の俳句を作らせてみて、それらを比較してすることである。その間には何のつながりも感じ取ることはできないであろう。これに対して一人の人間の作った一連の俳句には、たとえその人がどんなにつまらぬ詩人であろうと、確実にその人の人柄が現れるであろう。そしてそれこそがその俳句群が本物であることの証明である。

生き物も、俳句と全く同じく、その作り手によって息を吹き込まれた何ものかである。ただ単に物理的条件を満たし外面的な形を完成させたとしても（かりにそんなことが可能だとして）、それは生き物を作ったのではない。したがって神が最初の人間に「いのちの息吹」を吹き込んだという聖書の話は、現実の事実でなければならない。そして神の創造と人間の創造、特に芸術創造を、同等のものとする統一思想の考え方もまた——これを科学的見地から見ても——真実でなければならない。

生命とは何か？

生命とは単に「無生物からの生命の発生をいう」ものであろうか？ 教科書著者のこの

素っ気なさは、今日の平均的な理科教師たちが、いかに自然主義の牢獄の中に閉じ込められているかを示すものである。彼らは学生たちをもまたその中に閉じ込めるのを使命と考え、それが学生たちの利益になると思っている。実際は彼らは、学生を騙して間違いへと導くばかりでなく、彼らの質問を封じ、そのことによって科学を窒息させ、科学へのモチベーションを奪うことによって、学生のために不利益を働いているのである。

教科書のこの言明は、全くの虚偽だと言ってよい。生物は無生物から発生するのでないことは明らかである。しかしここでは——進化の章全体についてそうであるが——ひそかに言い逃れが用意されている。もし誰かがこれを全くの虚偽だと抗議すれば、唯物論科学者は、あたかも理不尽な抗議をされたかのように、生物はすべて限られた種類しかない原子という非・生命的な物質で構成されていることを疑う者はいない、とでも言うだろう。これは事実の半分だけを言うもので、明らかに詭弁である。しかしこれを全面的真理として人々に受け入れさせるのが唯物論者の策略である。

「化学進化」という欺瞞的な概念がそうであるように、これは必要条件と十分条件を故意に混同するもの、すなわち必要なものを十分なものとして押し付ける不正直なやり方である。我々の生物教科書は、生命体に必要な構成要素を生み出したかもしれない環境的条件を、あたかもそれが生命起源の問題にとって重要なすべてであるかのように、説明し続ける。それはまるで「モナリザ」の誕生を、物理的なダ・ヴィンチの腕の力が、絵具やカンヴァスという物質に向かって働いた結果として説明するようなものである。

唯物論あるいは科学的自然主義は、形而上学というものを、あたかもそれが科学とは関係がないかのように排除する。実は、形而上学が形而下学（物理学など自然学）に先行するのである。そうでなかったら科学者は何をしてよいか分からないだろう。そして自然主義という形而上学は、明確に科学者になすべきことを指示する——すなわち、自然を自然的（物理的）因果関係で説明することである。これはさまざまな問題を引き起こす——特に主題が生命である場合には。

「生命とは何か」という問いは哲学者の問いであって、科学者の問いではない——少なくとも今日の唯物論的傾向をもつ科学者の問うことではない。まず最初にこの問いを發し、少なくとも運用可能な一つの仮説に達することなしに、科学を正しく基礎付けることはできない。ところが現実には、この問いは科学者によって独占され、科学者の解釈する問題の側面だけが支配的になっている。その結果として、被害を受けるのは科学そのものであり、それと同時に最も被害を受けるのは、人生（生命）の意味を奪われた一般大衆である。

健全な仮説を求めて

我々は宇宙や我々自身について、究極の真理を知ることを、望むことはできないしまた望みもしない。しかし少なくとも可能なかぎり最上の仮説、すなわち最も効果的で包括的な宇宙像を提供する一つの解釈を提唱することはできる。我々の生物教科書によって代表されるような唯物論的科学的問題は、それが自分自身を仮説として考えることもできず、

自分を絶対の真理として、他のいかなる可能性の存在をも認めないドグマとして、考えていることである。

教科書に関する限り、これはものの言い方、つまり文章スタイルの気配りの問題でありうる。正直ということが、教科書にとって、真の教育的見地からも最大の策であるはずである。分かっていないことは分かっていないと書くべきであり、明らかに理性に反するようなこと（時計の箱振りや「化学進化」理論のような）は、一面的な考え方もかもしれない、思考の方法が根本から間違っているのかもしれない、といったコメントを正直に書き入れるべきである。無知や自信のなさは恥ずべきことではない。真に恥ずべきことは、不正直と、そうでもないのに権威者のように見せかけること——特に適切な判断力を身につけていない若者に対してそうすることである。

生命の自然主義的研究が捨てられるべきだと言うのでは全くない。ただ、それは自分自身の立場（自然主義科学の現状）を知っていなければならない。すなわち、それは生命の物理的側面をかなり見事に解明したが、生命の非・物理的側面については何も知らないということを、自覚していなければならないのである。

生命に二面があるということについては、生き物を見ることができるが、生命そのものは見るできないという事実から分かることである。誰も、生き物は存在していて現実であるが、生命そのものなど存在しない、それは幻想にすぎない、などと言う者はいないだろう。おそらく神の存在を否定する無神論者でも、その解釈はどうであれ、心の存在をきっと信じているように、生命そのものの存在は信じられるのではなかろうか。

そこでまず最初に、生命体から区別された生命の存在は、たとえ目に見えなくとも、現実として一般に受け入れられていると仮定してよいだろう。とすれば、どんな生物にも二つの側面がある、一つは目に見え、もう一つは目に見えない側面がある、と考えてよいことになる。そしてある一つの物に、右と左、長所と短所といったものでない、根本的に違った二つの側面があるとしたら、その場合には、どちらがより根源的であるか、すなわちどちらが存在論的に先んじて存在するか、という問題が生じてくる。

当然、我々の教科書著者のような唯物論者は、目に見える（物理的な）側面がより根源にあると主張するであろう。その事実は彼らにとっては、何よりも大切なことであるから、もう一方の目に見えない側面はむしろ希薄で実体性に乏しいもの、あるいは目に見える現実の影にすぎないもの、一次的な（物理的）存在に対する二次的な存在として、彼らは捉えるであろう。（彼らにとっては、心とは脳の産物にすぎない。）

これに対して、存在の構造ということに関して、全く別の、目に見えない側面が——生物についてであろうが、現実の全体についてであろうが——存在の基底をなしている、すなわち目に見えない側面が、時間的にも構造的にも、目に見える側面に先立つと考える立場がある。

二つの競合する命題

これら二つの対照的な哲学的立場は、次のような二つの象徴的に表現された命題として定式化することができるだろう：

(A) The eye precedes seeing. (眼が見ることに先立つ)

(B) Seeing precedes the eye. (見ることに眼に先立つ)

ここで「先立つ」(precede)とは「時間的にも構造的にもより根源にある」ことを意味する。

ところで命題(A)は、物質から生命が出てきた、と何の躊躇もなく明言する我々の教科書著者によって採用されている公式である。そもそもの初めに、ただ生命を持たぬ物質があった。そしてそこから、どのようにしてか生命(生物)が現れた。換言すれば、生命を持たぬ物質が地球歴史のある時点で、生き始め、動き始め、食べ、交尾をし、話し始めた。心を持たぬ機械的な構造物であるカメラが、偶然、理由もなく、まず先に現れ、しかる後それが、あたかも意志と目的を持っているかのように、見るという活動をし始めた。

命題(A)はダーウィン進化論の立場を言い表している。この命題の馬鹿ばかしさは明白である。しかしダーウィニスト(すなわち唯物論者)は、宇宙そのものは生命を持たないのだから、眼(あるいは最初の細胞)は、彼らの言葉を使えば「無生物的に」、ともかくも現れたのでなければならない、と主張する。いったい眼という物理的構造物が最初に形成されることなしに、どうして見ることができるのだ、と彼らは言う。そう言われれば、それはあまりにも当然なので、人々は(B)よりは(A)に与する——ただその場合、眼がどうして最初に現れることができたのかは、あまり気にしないのである。これが我々の唯物論的文化の特徴である。すなわち、唯物論的な優勢な力が合法的な(理にかなった)質問を窒息させるのである。実際、教科書や他の公共メディアなどを通じて、ダーウィニストたちは、長年にわたって命題(B)の合法性を否定しようと努力してきた、と言ってもよいだろう。このことは特に、ダーウィニストとインテリジェント・デザイン(ID)派の、最近の論争(むしろ闘争)を通じて明らかになった。この論争においてダーウィニストは、自分たちへの批判を押し黙らせ、ID提唱者が提起するような問題は存在しない、と言おうとしているのである。

仮説の選択

命題(A)は馬鹿げたものであるが、ダーウィニストに言わせれば、命題(B)はもっと馬鹿げている、あまりに馬鹿ばかしくて真面目に取り上げることもできない、ということになるだろう。そして科学者は神秘をその体系に取り込むべきではない、とも言うだろう。しかし私には、もし(B)が「神秘的」であるとするれば、(A)は「不気味」であり、その方がもっと悪いと思われる。もし(B)が科学ではないと言うならば、(A)も科学ではない。もしこの宇宙の根源に、見る意志や創造的衝動がある(あった)と想定することが馬鹿げた空想だというなら、物質がひとりだけで生き始め、動き始め、食べ、交尾を始めるという考えは、最悪の空想物語であろう。

そこで（A）と（B）は、普通には考えにくいという点で、宇宙の構造の説明としては対等であると考えことにしよう。そこで問題は、どちらがこの世界の現実にとってより根底的か、現実の目に見える側面（物質、眼）か、それとも目に見えない側面（生命、見ること）か、ということになる。これは仮説の選択であって、唯物論科学者が考えるような真理の選択ではない。これは証明する問題ではなく、より健全、より確か、より強力なものとして、直観的に選択する問題である。

生命のない物質が最も重要であって、すべての根源だとする唯物論者の想定は、いわば病的で、心の未発達、あるいは自閉症のような不適応を感じさせる。一見したところでは、それは硬い現実にしっかり根を置く健全なものに見えるかもしれない。しかしそれは現実のきわめて狭い領域に自らを制限するもので、その領域の内部では物事をかなりうまく説明するが、その外側では無力であり、最も悪いことには、外側には何も存在しないかのように振舞うことである。その不健全さの印象の少なからぬ部分は、この思い込みの傲慢さから来ている。

次のことは認められねばならない——もし現実の物理的（目に見える）側面が基底であると主張するなら、全く同じ権利をもって、目に見えないが疑いようもなく存在する「生命」もまた現実の基底であると主張することができる。私はこれを life-mind（生命 - 心）と呼んでもよいと思う。なぜなら心は生命と同じものとして扱われはしないが、両者は不可分だからである。

ここで言う生命（あるいは生命 - 心）の概念は単に生物学的なものだけでなく、形而上的あるいは宇宙的なものであることに注意しておかなければならない。私は生物教科書のまさに反対のことを主張したいと思う——すなわち、生きているものも生きていないものも、すべてがこの意味での生命、すなわち先立って存在する現実としての生命から生ずる。

私の言っているのは単に、「生命」という言葉に置き換えただけの神を主張することではないか、という批判があるかもしれない。そうではない。私は議論の哲学的レベルに自分を制限しているのであって、神学的なレベルの議論をしているのではない。すべてに先立って（すべての基底として）存在する現実としての生命とは、この世界を超越するものではない。それは動物や人間が死ぬときに、一つの事実として感じられ経験される。生命は見えないが存在し、この世界に浸透し、おのれの存在を感じさせる。ID理論の「デザイン」の根源のように、それは自然界に属するものではないが、しかし硬い事実として確かに存在する。

「生命の場」

私はかつてこれを「生命の場」として考えてみることを提唱した。それは磁場や重力場のように、場そのものは目に見えないが、金属の破片や重量のあるものをそこへ持つていくと、それが目に見え感じられるようになるのに似ている。(4) 後に、同じアナロジーが『新版・統一思想要綱』（2000）に使われているのを知った。

宇宙は生命が充満している生命の場であるが、それは神の性相に由来するものである。そこで生命を捕らえる装置さえあれば、生命がそこに現れるのである。その装置にあたるのがDNAという特殊な分子なのである。「性相と形状の階層的構造」から、そのような結論が導かれるのである。(5)

宇宙を「生命の場」として考えてみることは、生命がこの地上でどのようにして始まったかを想像してみる上に、大いに助けとなるものである。断じてそれは、我々の教科書が教えるように「無生物から発生した」のではない。生物は初めから潜在的に（目に見えない形で、「性相」として、アイデアとして）存在しており、そして最初の細胞あるいは後の生物種のための「形状」的（物的）条件が、その生命体の構成要素や、それが生きるための環境に関して満たされたときに、初めてその潜在的な存在が目に見える形で顕在化する、と仮定してみることは、仮説として非常に有効である。生命の起源をそのように思い描くことは、唯物論的などんなシナリオよりはるかに説得力がある。

唯物論的な科学者は、それを全く科学ではないと退けるであろう。しかし彼らの「科学」はこのような問題について全く何も説明することができないし、彼らの思い込みの優越性と正当性は、ただ自然主義を厳密に守ることだけにあるのである。

もし目に見えぬ要因を仮定することが非科学的だとして退けられるなら、科学は全く閉塞状態のままであり、科学教育は人々の道徳性にとって有害なものとなるだろう。私が言っているのは、科学と科学教育が基礎付けられるべき、そしてそれに基づいて現実の科学研究が行われるべき、哲学の選択の重要性である。最初の想定あるいは足場が肝心であり、その選択いかんによって全く異なった結果に到達し得るのである。

インテリジェント・デザインの支持

「生命の場」の存在は頭で考えても納得できるが、現に事実でもある。この考え方はID派の科学者たちの発見、特に宇宙の「微調整」(fine-tuning)、とりわけ生命を可能ならしめる我々の惑星のファイン・チューニングの証明によって、支持されるものである。天文学者たちによるこの発見、すなわち基本的な物理法則やその常数が、高等動物や彼らが生きるためのぴったりの環境を生み出すのに必要な、考えられぬほどの厳密さで奇跡的に微調整されているという事実の発見は、決して小さな問題ではない。どのように見ても、この宇宙は生命のためにデザインされているとしか考えられない。宇宙そのものが、この惑星上に生命体が現れる前から、まるでそれ自体が一つの生命体のように、人間という高等生物を最終的に生み出すために成長(進化)してきたかのようなのである。彼ら天文学者は、この宇宙のすべての努力がこの我々の地球に集中されてきたことを証明している。この宇宙には、他に我々のいるような生命に適した場所はない、と彼らは結論している。我々の惑星は宇宙で唯一の「特権的惑星」なのである。

記念碑的な、目を開かせる著書『特権的惑星——この宇宙での我々の場所がいかに発見のためにデザインされているか』（2004）の中で、（二人の）著者は最後の章を次のような印象的な言葉で結んでいる。

アロウェイ[エリー・アロウェイ、カール・セーガンのSF『コンタクト』の女主人公]の探究には宇宙からの信号、暗号化された素数の配列がかかわっている。これは人を興奮させるフィクションである。現実には、そのような信号が地球に送られてきたことはない。にもかかわらず、この小さなオアシスの彼方の天空を見つめるとき、我々が見つめているのは意味のない深淵ではなく、我々の発見の能力に合わせられた一つの驚くべき劇場である。おそらく我々は、どんな数列よりはるかに意味の深い宇宙の信号を見落としていたのである。それは一つの宇宙を開示する信号であるが、それがあまりにも巧妙に生命と発見のために細工されているので、我々が好んで期待し想像してきたいかなる知性とも比較を絶して、はるかに広大で、はるかに古く、はるかに荘厳な、地球外知性[インテリジェント・デザイナーのこと]の存在を囁きかけてくるように思えるのである。(6)

「生命の場」の仮定された存在をさらに強固なものにするのは、例えば生物学者マイケル・デントンの『自然の運命——いかに生物学の法則は宇宙の目的を開示しているか』（1988）といった本である。ここで著者は、宇宙が人間のために意図的にデザインされているのみならず、我々の自然環境、例えば水、大気、光、火、生物の構成材料といったものすべてが、驚くべく絶妙にデザインされているという結論を出している。

ここから現れてくる自然の像は、明らかに自然の目的論的見方と調和するものである。細胞がある特定の生物学的な役割のために利用する一つひとつの構成部品、時計の中の一つひとつの歯車が、その役割のための唯一の、かつこれ以上ありえない適材であるという事実は、強くデザインを示唆するものである。…部品がある一つの目的のために特別に作られているのは、デザインの紛れもないしるしである。…生命体を可能にする構成部品そのもののデザインは、カール・パンティンが何年前に指摘したような、自然選択の結果ではありえない。生命の構成要素の間の、多くの生死にかかわる相互適応性は、そもそも生物が存在する前から、そして自然選択が作用し始めることのできるずっと前から、物理学的に与えられていたのである。(7)

このようなデザイン議論が今広がりつつあることを踏まえて考えれば、ダーウィニズム教科書の「無生物から生命が発生した」という説明は、子供のための、質の悪い、有害な恐怖ストーリーのように響くのである。

（我々は光を当たり前のものとして考えているが）光の生命に対する適合性の、恐るべ

きありえなさに言及しながら、デントンはブリタニカ百科事典のこの事項についての説明を引用しているが、それはこの記述が、通常の事典の標準的な書き方から外れていて興味深いからである。

この[電磁波の波長の長大な]スペクトルの、地球の大気の通過を許され、液体の水の通過を許される唯一の領域が、生命にとって有用なごくごく狭小なスペクトルの部分だという驚くべき事実について、ブリタニカ百科事典の最も新しい版（15 版）は次のようにコメントしている——「地球上の生命のあらゆる相にとっての、太陽の可視光線の重要性を考えてみるならば、大気の吸収と水の吸収スペクトルの中のこの劇的に狭い窓に対して、我々は畏怖の念に打たれざるを得ないのである。」（強調はデントン）（8）

唯一者の二重表現態（一元二相論）

これまでに見てきたことから、統一思想と I D 理論を組み合わせることによって、生命の起源の問題がはるかに理解し易くなることが分かるであろう。

統一思想に特有の仮定の一つは、性相（霊、心、見えないもの）と形状（体、物質、見えるもの）の二重性である。その場合に起こってくる問題は、これら二つのものが同質的なものか異質的なものか、すなわち関係性のあるものか無関係なものかということである。『新版・統一思想要綱』（2000）はこの点について、明瞭に系統立てて述べられている。

この問題を理解するためには、本性相と本形状は異質的な二つの要素か、あるいは同質的な要素の二つの表現態なのかを調べてみればよい。結論から言えば、本性相と本形状は同質的な要素の二つの表現態なのである。

．．．

そのように性相の中にも形状的要素があり、形状の中にも性相的要素があるのである。したがって、原相において性相と形状は一つに統一されているのである。本質的に同一な絶対属性から性相と形状の差異が生じ、創造を通じてその属性が被造世界に現れるとき、異質な二つの要素となるのである。（9）

これだけを単独に読むならば、統一思想の記述は、十分に説得力はあるものの、それでもなお秘教的で非現実的に響くかもしれない。しかしこれを先に引用したようなID科学者たちの証言と併せ読むならば、それは秘教でも抽象的思弁でもなく、現実的な事実であることが分かる。

もし、我々が仮説的に考えたように、さまざまな生命体が前もって構想され内的にデザインされ、物的な諸条件が整ったときにそれが顕在化されるものとするなら、もし仮にその構想と物的条件の間に全く関係がなく、統一思想の言う「異質的な」ものであるとしたら、創造はうまくいかないであろう。例えばデカルトの哲学におけるように、心（考える実体）と体ないし物質（延長される実体）の間に関係がないか、関係付けることが難しいのであれば、生物の起源を説明することは非常に難しいであろう。そしてそのことから、それは結局は唯物論につながっていくのである。

しかし統一思想によれば、心（性相）と物質（形状）はこの世界では別々のものとして現れるが、元もとそれらは、神において「一つに統一されている」ところの性相と形状に起源を持つのである。「それらは根本においては同じ一つの絶対的属性である。」したがって、この二つは互いに相手の要素を持つことになる。

このような説明を与えられるなら、我々が生命の起源と言っているものは、はるかに思い描き易くなる。潜在性（潜勢態）としての生命と、その受け皿としてこれを顕在化する手段は、同じ根から来たものであり、だから相互の要素を共有している。もしこれらが、伝統的な西洋哲学がそう考える傾向をもつように、互いに見も知らぬもの、あるいは対立するものであったとすれば、すなわち、もし心と物質が争うような関係にあったとすれば、その調和は非常に難しく、物質は結局、心を切り離して、自分独自で生命を生み出そうとするだろう。これが教科書の「化学進化」、「無生物からの生物発生」物語である。

生命はどのようにデザインされるか？

「生命の場」としての、あるいは一元二性論としての宇宙観は、ID理論の中に明瞭に存在はしていないかもしれないが、それは上に引用したような議論の中に感じ取ることができる。

これらの議論によれば、137億年の宇宙歴史の間に起こったすべてのことは、我々人間を頭において、意図的にデザインされたものと解釈することができる。物理学上の驚くべき数値の微調整、天文学上のありえない配置的・時間的な精巧さ、生命の構成材料の完全な目的性をもつ工作、この惑星上の環境の完全な居住適合性（それが同時に、完全な観測・発見の適合性でもあること）、加えてこのような惑星がたった一つしかないこと——すべてこういったことが一つになって、「生命の場」すなわち生命の受け皿を構成しているのである。

科学者はこれまで、こういったことを考えてみることを宗教的だとか超自然的だとして、決して自分自身に許さなかったのみならず、ダーウィンの「闘争」とか「生き残り」と

いう概念に例証されるように、我々の環境を我々に敵意あるものとさえ考えてきた。彼らは生物をデザインされたものとして研究してきたかもしれない。しかし彼らはそれを、広大な無機的な宇宙世界に対して「異質的な」、例外的なものとして考える傾向があった。今新しく台頭しつつあるパラダイム・シフト、科学における革命的な観点の変化は、この唯物論的な説明を無化するだけでなく、新しい科学上の発見に導くであろうと思われる。

生命の物質的要素（構成材料や環境）と生命の霊的要素（潜在的デザイン）の二つは、ともに同じデザイナーによってデザインされ、元もとの世界では一つの調和した全体であったものが被造世界において分かれたと考えるなら、互いに相手の幾分かを自分の内部に持つのは明らかであろう。とすれば、「生命の場」としての宇宙という観点は、宇宙に内在する目的の観念とともに、生物学にとって必須のものであるはずである。

ではいったい、いかにして最初の細胞や後の生物種（あるいはそのコード化された情報）が現実創造されたのであろうか？ それは生命と「生命を捕らえる装置」（物的条件）との間の相互作用、すなわち「授受作用」によって可能になるに違いない。実験物理学における「共鳴」の概念がここで適用可能かもしれない。しかし現実にはどのようにして？ 現時点では、科学者にせよ誰にせよ、生物がこの地上で現実どのようにして生じたかを具体的に——例えばCGのようなものを使って——示してみせるのは不可能ではないかと思われる。しかし創造の原理が明らかになったのは確かだと思われる——生命の創造は、統一原理とIDが相補的に明らかにしたような方法によって可能になったのである。

単なる馬鹿らしさでなく犯罪

ダーウィンのメカニズム（自然選択とランダムな変異との組み合わせ）ほどの、明らかに理性に反し不自然な考え方が、これほど長く学界と教育界を支配してきたということは、実に不思議なことである。あの生命起源のカクテル・シェーカーによる説明を学生に教え込むことの馬鹿ばかしさを、もう一度考えてみられたい。生命の神秘、したがって我々自身の存在の神秘が（部分的でなく）全面的に我々の知っている物理的メカニズムによって解き明かされるかのように言うのは、単に間違いというだけではない。それは人類に対する犯罪行為であると言ってよい。

ジョナサン・ウエルズが指摘しているように、ダーウィン進化論のこれほど多くの根拠のない証拠が、咎められもせず、これほど長く我々の教科書に用いられてきたということは、一大ミステリーというほかはない。ダーウィニズムとその宣伝の歴史には、そもそもの最初から不気味なものがあったのである。例えば、我々のよく覚えている、あのダーウィン進化の証拠として教科書が必ず載せている、いくつかの脊椎動物の胚を比較して示した絵は、エルンスト・ヘッケルというドイツ人による捏造だということが分かっている。ヘッケルは当時から数々の偽造で有名であり、当時の学者たちによって告発され、それを認めている。にもかかわらずこの胚の絵は、権威をもたされ一世紀以上にわたって利用されてきた。これは解明を要求するミステリーである。

ヘッケルは生物学者というより政治的イデオログで、当時の帝国主義ドイツのためにダーウィン進化論を利用した。これは「政治学とは応用生物学である」という、ナチスの宣伝にも使われた彼の有名な言葉からも明らかである。20世紀初頭のドイツにとって、その他のヨーロッパ列強にとっても同様であったが、人種差別のための科学的根拠が是非とも必要であった。ダーウィニズムはそれを提供することができた。そしてヘッケルののち上げた「個体発生は系統発生を繰り返す」法則を証拠立てるための胚の偽造絵は、当時の帝国主義的人種差別のために必要であったと解釈されねばならない。そもその初めからダーウィン進化論は、証拠の有無にかかわらず、またヘッケルが詐欺師であろうとなかろうと、「科学」であり「事実」であることを要求されたのである。

ダーウィニズムという科学によれば——と彼らは論じた——生物種の間には（胚発達の各段階の間にけじめがないように）本来けじめがないのであるから、当然サルと人間の違いに区別はない。本当の区別は、適応のすぐれたより高級な人種（おそらくコーカサス人種）と、より劣った他の人種の違いでなければならない。

ここにヘッケルによるもう一つの偽造絵（主著『創造の自然史』（1868）の口絵）がある。これを生物教科書の胚の絵と並べ、学生に謎解きをさせてみることをお勧めする。

ヘッケルの『創造の自然史』（1865）の口絵——6人の「人種」（1～6）と、6種の類人猿（7～12）を描き、「最も下等な」人種がいかにサルに近いかを示そうとしている。

ヘッケルはこの絵についてこう説明している。

最も高度に発達した動物の心と、最も発達していない人間の心との間には、ほんのわずかの量的な違いがあるだけで、何ら質的な違いはない。そしてこの違いは、最も低い人間と最も高い人間の心の差よりはるかに小さい。あるいは最も高い動物と最も低い動物の心の差よりも小さいと言ってよい。(10)

私はこの絵を、リチャード・ワイカートの『ダーウィンからヒトラーへ——ドイツにおける進化論倫理、優生学、民族主義（人種差別）』（2004）から拝借した。この本の中心人物はヘッケルその人であり、著者は結びに次のように言っている。

ダーウィニズムそれ自体がホロコーストを生み出したわけではない。しかしダーウィニズム、特に社会ダーウィニズムや優生学というその変種がなければ、ヒトラーや彼のナチ追随者たちは、彼ら自身とその協力者たちに、あの世界最大の残虐行為の一つが、実際には道徳的に称揚されるべきものなのだと納得させるための、必要不可欠な科学的根拠を持つことはできなかつたであろう。ダーウィニズム、あるいは少なくともダーウィニズムのある自然主義的解釈は、道徳を逆立ちさせることに成功したのである。(11)